説教20221009ルツ記1：8-19aルカ17：11-19「清くされた喜び」

「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」１０人の重い皮膚病の患者たちは、声を張り上げて、遠くにいるイエス様に、この様に言いました。

この時、この１０人は、同じ言葉でイエス様に懇願をしたのですが、この後、１０人が取った行動は分かれました。そのうちの９人は主イエスのもとには戻らず、たった一人だけが戻って来て主イエスを礼拝賛美したのでした。その分かれ目は何だったのでしょうか。このことは黙想すればするほどに、深くて畏れ多いことが行間に隠されていますので、よく聞いて参りたいと思います。

私たちが、主イエスの後に、へりくだって従順に歩んで行くことの実際は、常に、「主よ、どうか私を憐れんで下さい」と祈りながら、日々の生活を歩ませて頂くということです。そうすれば、主イエスは、私をどんなピンチからも救い出して下さいます。それは私たちの信仰であり、言われなくても当たり前のことと、皆さん思われることでしょうが、私たち人間は、いざピンチに陥ってしまった時には、冷静さを失い信仰が揺らいで、主イエスにではなく、人に憐れみを求めてしまう者であります。ですから、一番大事なことは、最もピンチに陥った時にでも、憐れみを求める方を間違えないように、私たちは平生から、主イエスにこそ憐れみを求め続けるという習慣を培っておく必要があります。

この様に、私が主イエスに憐れみを求め救いを求めるということは、一対一の個人的な祈りではありますが、同時に、祈りの共同体、即ち教会が、同じ言葉で共に祈る、みんなの祈りでもあります。先週、上田充香子牧師が、当教会に来られました。ペトロの手紙１の　3章から大変、励まされる説教をして頂きました。

ペトロの手紙一　3章 17節

神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。

この様に書いてあります。まことに私がピンチに陥った時には、善を行って苦しめられるということがよく起こります。その苦しみは一言では片付けられない、筆舌に尽くしがたい苦しみであります。そんな状況に陥った時に、主イエスは、私がその苦しみに一人で耐えることを望んでは居られないようです。又、誰でもそのような苦しみに遭遇することが予想されます。ですから、教会は、心を合わせて、同じことばで、「主よ私を憐れんで下さい」と共に祈り続けていく必要があるのです。

先週の木曜祈祷会で採り上げました詩編４１編は、私たちが病の床に伏した時のことを歌っています。私たちが病の床にあることは、主イエスが十字架に付けられた時のことを思い起こさせます。私たちがこの地上で召される前の、最後の病の床に臥す時、幸いであるかどうかは、その方が、それまでの人生で、常に、主イエスに憐れみを求めながら生活して来たかどうかによります。主イエスは憐れみと慈しみに満ちた方ですから、人に憐れみを乞われること自体を喜ばれます。そして、必ず、その人が置かれた状況にふさわしい応答をして下さいます。イエス様は生きている神様ですので、私たちが求めれば必ず答えて下さるのです。そうして私が主イエスに憐れみを求める生活を続けていくうちに、私と主イエスとの間柄は深まって参ります。親しくなるということです。主イエスは、その都度私に恵みを与えて下さいます。そして恵みの上に恵みを与えて下さいます。それは、人間にとっては不思議な成り行きでもあります。時には主イエスからその都度受け取るプレゼントの意味が分からないこともあるでしょう。でも、それをその都度、両手を広げて、しっかりと受け取ることが出来る方は、間違いなく、最後の病の床で、主イエスに引き寄せられる幸いな方であります。

では、ルカ福音書に戻りましょう。

ルカ福音書17：13

声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。

１０人はこの様に同じ言葉で主イエスに祈りました。しかし、その思いは違いました。イエスの処に戻らなかった９人の思いはどんなだったでしょうか。この９人の置かれた境遇も、実に憐れむべき状況であったことは間違いありません。９人がイエス様に近づくことが出来なかったのは、彼らが重い皮膚病にかかり、律法の取り決めによって、人に近づくことを許されず、社会から隔離されていたからでした。これだけでも、この９人が憐れむべき方々であるのが分かりますが、それに輪をかけて、律法にはどぎついことが記されています。

レビ記 13章45-46節

重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。

この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。

社会状況というものは移ろいゆきますので、この様な、取り決めを一概に否定することは出来ませんが、とにかく、この９人は、この律法を大いに恐れながら、重い皮膚病を患いながら深い悲しみの内に生活をしていたことが思われます。

主イエスは、この９人の体を清くされました。それは、この９人が、祭司に清くなった体を見せて、祭司から「あなたは清い」という判定を受けて、社会的な隔離から解放する為でした。当時の祭司は、社会的にそれだけの権威を持っていたのです。祭司から「あなたは清い」とのお墨付きを得て、再び、人々と交わってその社会の中で暮らすことが出来るようになったこの９人の喜びは、それは大きな喜びであったことでしょう。しかし、この大きな喜びの中に、落とし穴がありました。

本来、よろこぶということは、善いことであります。しかし、その喜びの輪の中に、主イエスがいないならば、それは、危うくはかない喜びとなってしまうことでしょう。この９人が、社会的な隔離から解放されて、みんなと共に喜ぶことのどこが悪いのか、と私たち人間は思ってしまうことでしょう。しかし、その喜びが大きければ大きいほど、人間はその喜びに酔いしれるようになって、そこに潜んでいる悪についての省察が出来なくなるということが起こり得るのではないでしょうか。

当時の祭司は「あなたは清い」と重い皮膚病の患者を判定して、その人を自由にする権威を付与されていたわけですが、そういった社会の在り方が、やがて、律法主義という悪をはらませ、そのことは後の世から見れば、明らかに悪いと言えるのでありますが、その時の当事者には、そのような客観的な見方は出来ないのが世の常であります。

先日、日本キリスト教団の総会が開かれまして、私はユーチューブで聞いていたのですが、開会の説教で、平野克己牧師が、「今の日本キリスト教団の教会にはイエスキリストが居られないのではないでしょうか」と、自己反省の弁を述べられたのをお聞きして、その言葉を私は重く受け取りました。

なぜこのことを紹介したかと言いますと、私たち人間は、とにかく喜んでいたい、悪いことや辛いことからは出来るだけ目を背けていたいという、いつの時代にも共通した性格を持ち続けている様に思われるからです。

その様なわけで、喜びに酔いしれる私たち人間は、かなり状況が悪化してから、ようやくその中に潜んでいた悪魔の芽や振る舞いに気づき、それに目を向けるようになりますが、神の目から見れば、善いことも悪いことも、最初からお見通しであります。

それはこの９人の行いによって、見事に明らかにされました。彼らが、主イエスに感謝し、礼拝し、讃美を捧げることがありませんでした。この９人にはそうする気がなかったのですから、或いはこの９人を個人的に戒めても、らちが明かないかも知れません。この９人は、この喜びの出来事によって、かえって当時の律法主義という悪の枠内に、取り込まれたのかも知れません。でも彼らの味わった喜びは人間的には、この上ない喜びの成就であったことは想像に難くありません。

私たちは福音書を読む時、イエス様の目から見て、全てを見通すことが出来ます。イエス様は、この９人の有様を見て、彼らを憐れんだことでしょう。なぜなら、彼らは、主イエスから離れ去ったところで喜びに酔いしれ、益々まことの喜びである主イエスを離れて行こうとしているからです。

それでは、もう一人の、主イエスのもとに、礼拝賛美するために戻って来たサマリア人の場合はどうでしょうか。イエスはこの戻って来たサマリア人に言いました。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」この一人のサマリア人のほうが、他の９人と較べて幸いであることに違いありません。イエス様は言います。「あなたの信仰があなたを救った。」これはどういう意味かと言いますと、このサマリア人の主イエスへの深い信仰が、彼を主イエスのもとへと連れ戻したということです。ではこのサマリア人の主への信仰は、どうやって深められたのでしょうか。それについては、彼が外国人であったこと、正統なイスラエルの民からしてみれば外国人或いは境界線上の人であったことが、かえって幸いしているように思います。簡単に言えば、このサマリア人は、重い皮膚病がいやされた喜びを、祭司たちが中心にいる社会の人々と喜び合うことが出来なかったということです。正統なイスラエルの民に数えられなかった彼は、その社会にもともと受け入れられ難かったので、その戻るところは主イエスのもとしかなかったのでした。そういった彼の境遇を推しはかってみますと、彼は、その人生を過ごしていく中で、それこそ常に「主よ、どうか私を憐れんで下さい」と祈りながら、主に救いを求めて生活をして来たのではないでしょうか。ですから、このサマリア人は、この時も、迷うことなく主イエスのもとに跪いて、感謝と賛美を捧げることが出来たのです。

この様に、私たちの主イエスへの信仰は、主に憐れみを乞い、御言葉を聞き、与えられた恵みを受け取って、主に感謝と賛美を捧げるということを、全生涯にわたって繰り返していくうちに、何か不思議な仕方で深まっていくことであります。その道行きにあってはハラハラしドキドキさせられ、また、時には絶望を味わう時もあるでしょう。しかし、私たちはその都度、置かれたところで再び「主よ、どうか私を憐れんで下さい」と祈れる機会が与えられます。大切なことは、この繰り返しを、この９人の様に終わらせないことです。自分自身で満足してしまって、イエス様を見失い、「主よ、どうか私を憐れんで下さい」という祈りを忘れてしまうことは、大変危険な道であります。

私たちが味わう喜びの時というのは、この世で完成されるようなものではありません。私たちがこの世で味わう喜びの時には、常に一抹の苦みが含まれているように思います。その苦みは、あなたの喜びは未だ完成していない、という主イエスから与えられる福音でもあるでしょう。

　ナオミ、ルツ、オルパという未亡人たちも、当時の社会で、大変な苦境に立たされ、ずっと、苦しみを味わい続けてきたことでしょう。しかし、それゆえに彼女らは「主よ、どうか私を憐れんで下さい」と祈り続けて歩んできたことでしょう。ルツとボアズの出会いは、その様に祈り続けたことで、主が時に適って与えて下さった恵みの一つでありました。

私たちは、主イエスの十字架を常に見上げつつ、この様に、終わらない苦しみと背中合わせにある主の恵みにあずかる幸いを覚えて、この一週間も共に「主よ、どうか私を憐れんで下さい」と祈りつつ歩んで参りたいと願います。